今宵、サンタがかける

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
今宵、サンタがかける

【Ｎコード】
Ｎ１３２４Ｊ

【作者名】
紅月

【あらすじ】
今年もクリスマスがやってきた。
サンタの家へやってきたのは・・・？

（前書き）

クリスマスなので、何か書きたくて書いてしまった・・・。
文章など至らないところがありますでしょうが、そこはまぁご容赦を。

そこは、森の中。
そこは、海の底。
そこは、空の上。

いろんなところにいる、いろんな存在がざわざわとざわめいている。この夜を楽しむように、この夜に期待を込めて。

そこは、国。
そこは、都市。
そこは、町。
そこは、子供達のいる家。

いろんな存在がまた、ざわめく。

『今年も、仕事よ』

誰かが、そうささやいたのかもしれない。星達の瞬(またた)きが強くなったような気がする。

◇◆◇◆◇◆◇

「ふぅ」

抱えた白い袋をそりに乗せる。白い袋がそのそりにはすでに複数乗っており、そんなそりが他にもたくさんある。白い袋をそりに乗せた人物は恰幅のいい年寄り、と言っても差し支えがないのかもしれない白いひげに白い髪をした老人。

俗に言う、サンタの格好をしている。

「今年は、これで、全部かな？」

体育館以上に広く、野球ドームよりもなお広い空間に並べられたそりをいちいち確認している暇はもうない。だから、乗せる時から細かく確認していたのだが、やはり、いざとなると自信がなくなってしまうのは、この老人にとってはいつものことだった。一応、自分の近くのそりだけは簡単に確認しておく。それで、満足したのか、彼は自宅に戻って行った。

彼は暖炉に火を入れてマグカップになみなみと注いだホットミルクを口にする。ゆったりとソファにすわり、外を見ると雪が降り出していた。寒いとは思っていたが、どおりで、と彼は口にし、ホットミルクを、一口、飲む。

雪が降っているのに、空はとても明るい。彼の住む地方、彼の住む世界ではたとえどんなことがあろうと、この日だけは必ず晴れる。

コンコン。

家の扉がたたかれる音を聞いて、彼はゆっくりと立ち上がる。戸をあけたそこにいる影を認めて、彼は微笑んだ。

「やぁ、待っていたよ。えーと。」

「チロル、よ。サンタのおじいちゃん。」

ぼんやりと自身から淡い光を放つ少女、チロルはフードを下ろして、老人に紙を差し出した。

「はい、これね。」

「ふむふむ、分かったよ。ちょっと待っていておくれ。」

老人は家に戻ると、一枚の紙と、一つの鍵を持って少女のもとへと戻る。少女はそれらを受け取るとはしゃぐようにあたりを駆け回る。

「今年も、やってきたよ！！この季節が、この日が！！」

そう言うと、先ほどまで老人がいたところに向かって駆け出す。しばらくすると、光の道が空へと伸び、そこからそりが一台、駆けていく。それを見届けた老人は再び、ゆっくりと時間をすごそうとする、が。

コンコン。

また、戸をたたく音。今度はジュークと名乗る少年だ。チロルと同じように淡く発光している。ただ、チロルの暖かそうだった格好と違って、彼はノースリーブのシャツに、短パンといったものすごい軽装である。

「うー寒い寒い。ここは寒いなぁ、ほんとに。」
「それなら、もっと温かい格好をしてこればいいじゃないのかい？」
「でも、俺のところはあったかいからこれでちょうどなんだよ。ほい、これ」

チロルと同じように、紙を差し出され、老人はチロルに渡したものとはまた別の紙と、鍵を持ってきて、ジュークに渡した。

「へへっ。待ってろよぉ！！」

そしてまた、光の道をそりが駆けていく。

老人の家にはどんどんと人が訪ねてくる。十五、六歳の少年少女や、まだ十歳にもなっていないような子供達もたずねてきたかと思えば、すっかり大人になった人たちまでやってくる。彼らはみな、自身が淡く発行しており、彼らはみな一様に老人に紙を差し出し、老人から紙と鍵を受け取るとうれしそうにしながらそりのある場所へと駆けていった。

最後にやってきたのはティンと名乗る子供だった。三歳ぐらいだろうか。口調も舌足らずだ。

「さんたのおじちゃん、こんにちわ」

「おやおや、こんばんわ。遅かったみたいだけど、大丈夫かい？」

紙を受け取りながら老人が尋ねる。彼を待っていたのか手にはすでに紙と鍵が握られている。ティンは受け取って、老人に答えた。

「うん、だいじょうぶ。さっきね。たいようのおにいちゃんにいわれちゃったの。だからいそがなくちゃいけないの。」

「なにをだい？」

「『お前のところはお前がぐずぐずしていると俺が先に着いちまうぞ』って」

「そうかい、そうかい。それじゃあ、急がないといけないね」

そういわれて、ティンは微笑む。ティンの放つ光もそれにあわせて少し強くなる。

「うん！！だって、ぼくたちはたいようのおにいちゃんがいるとおしごとができなくなっちゃうもん！！みんながまっていて、ルーやミクもがんばってるんだもん、ぼくだってがんばらないと！！」

そういうティンの顔は決して「たいようのおにいちゃん」を邪険

にしているものではなく、自分の仕事への使命感にあふれている。
じゃあね、さんたのおじちゃん。そういってティンもまた、駆けていく。他の人たちより時間はかかったが、最後のそりも、光の道に乗って空へと飛び立っていった。
一年に一度の、クリスマスと呼ばれるこの日。サンタも大忙しだが、彼らも忙しい。老人は空を見上げる。空には丸い月がぽっかりと浮いていて、星も輝いているが、今日はその星がいつもよりも少ない。最後のそりを見送った老人は家の中では脱いでいた赤いコートを羽織り、首には真っ白のマフラーを巻き、真っ赤な帽子をかぶる。マフラーは去年、彼らがくれたものだ。とても、暖かい。
彼は、家の裏にとめてあるそりに乗り、紙を取り出す。紙をそりにある台に乗せ、鍵をその台にある鍵穴に差し込むと、そりの下に光の道がうまれ、そりがふわりと浮き上がる。

「さて、わしも、仕事をしようかの。」

駆け上がった老人のそりは空を駆けていく。星たちの間をかけては白い袋に入っているプレゼントを配る。月の横を通り過ぎれば月と会話を交わし、太陽とは挨拶を交わす。そうして、老人が家に帰るころには、一枚の紙が家に届けられている。
ずっとずっと昔から、変わることのない、彼らのクリスマスはこうして、過ぎてゆく。

『クリスマスパーティーの招待状・サンタさんへ』

（後書き）

短編なので紅月がお送りします。クリスマスになったので何か書きたいと思って十数時間。ようやっと、考え付いたこのネタはいかがだったでしょう？

正直、かなりぶっつけ本番で書いているので、至らないところが多々あったと思います。でも、かけてよかったかな。

さて、ここで後書きを読んでいる方はきっと本文もきちんと読んでくださっていると思いますからネタばれてきなことを書いていきましょう。主に、自分が書ききれなかったことについてですが、ね。

この物語でのサンタというのは「老人」と「淡く発光している人たち」です。うまく表現はできていませんが、後者のほうはよく読めば「星」のことをさしていることに気づけると思います。気付けない、というときは自分の表現不足です。すいません。

さてさて、星達は、そりを駆って自分達が瞬く空の近くの家などの、「子供」がいるところまで配達に行き、老人は星達へのプレゼントを届けに行くのです。ちなみに、配達場所は「子供」がいれば何処までも行きます。

このあとは、星たちや、老人がクリスマスパーティーを開きます。そこで、今年の仕事について話し合ったり、届けに行った先の子供達の話で盛り上がるのでしょう。

ネタばれてきなあれはここまでです。

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

この物語を読んでくださったあなたにも、あなたにも、あなたにも。

Merry Christmas.

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1324j/

今宵、サンタがかける

2010年10月17日03時50分発行